國學院大學学術情報リポジトリ

書評
笹生衛著『神と死者の考古学古代のまつりと信仰』(歴史文化ライブラリー417)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 時枝, 務, Tokieda, Tsutomu
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000193

〔書評〕

笹生衛著『神と死者の考古学　古代のまつりと信仰』（歴史文化ライブラリー417）

時枝　務

はじめに

本書のタイトルは衝撃的である。神と死者を併記し、しかもモノが対象の考古学の立場から考察し、古代人の信仰に迫るというのである。赤い帯には、「〝祭祀考古学〟の世界へ誘う！新視点による古代祭祀の復元と歴史的背景の分析」と、白抜きの文字が躍る。神と死者をともに扱う祭祀考古学とは、一体どのような学問なのか、誰でも興味を抱くこと必須である。以下、本書を簡単に紹介したうえで、「新視点」の意義を論じたいと思う。

一、本書の構成

本書は、「神と死者と古代の人々―プロローグ」「古代祭祀の実態」「古代の神観と祭祀」「祖への信仰と祭祀」「古代祭祀の終焉と現代―エピローグ」「あとがき」「参考文献」からなり、前半で神、後半で死者を扱う構成になっている。

「神と死者と古代の人々―プロローグ」では、神と祖に対する信仰について一瞥した後、「天武天皇から持統天皇の時代は、神祭りでも、死者の葬送の面においても、まさに古墳時代から律令時代への大きな転換点であったといえる。この時代に見られた神と自然環境との関係、祖への信仰は、古墳時代以来の伝統的なものなのか、新たな要素だったのか。そして、それは歴史的にどのような意味を持ち、現代の我々の文化・信仰にいかなる影響を与えているのか。この点を、発掘された遺跡・遺物の考古資料から検証し、考えてみようというのが本書の目的である」（九頁）と述べ、本書の課題が明示される。

「古代祭祀の実態」は、まず「神道考古学と古代祭祀」で、大場磐雄が創始した神道考古学が、臨時の祭場で石製模造品を祭器として使用する古代祭祀像を描いたことを紹介し、それが「中・近世の古典解釈と折口の『依代』を結び付け、それを考古資料でトレースして作られたものであり、必ずしも古代祭祀の実態を示していると言いきれない」（二四頁）と指摘する。そして、「祭祀遺跡から古代祭祀を探る」では、沖ノ島祭祀遺跡を手がかりに「五世紀前半から中頃、全国各地に展開し始める祭祀は、大和王権から貴重な鉄製品や鉄鋌、初期須恵器の提供を受けながら、地域の首長と人々が執行していた」（三五頁）ことをあきらかにし、また山ノ花遺跡と南郷大東遺跡の出土品から木製の祭器の存在に注目し、祭具の実態に肉薄する。さらに、「古墳時代祭祀の復元」では、『延喜式』によって幣帛が布帛・武器武具・農具などの組み合わせであることをあきらかにしたうえで、「幣帛につながる品々の基本的な組み合わせは、すでに五世紀前半から中頃、日本列島内の各地で祭祀遺跡が明確となる段階には成立していた」（六二頁）と指摘する。その後、六世紀に馬具が加わり、七世紀に甲冑が姿を消すなどの変化があって、幣帛が完成するというシェーマを提示する。こうした基礎的な作業のうえで、『皇太神宮儀式帳』から「祭祀の準備段階」「祭祀の中心部分」「祭祀後の対応」の三段階を抽出し、それぞれの段階における考古資料と史料を整理し、古墳時代の祭祀を復元する。しかも、「神の籬」から「神の宮」へという、祭場のあり方の変化にまで説き及ぶ。

「古代の神観と祭祀」は、まず「祭祀遺跡の立地と神」で、水辺・交通路・集落・山麓・島嶼などの祭場について取り上げ、「各地の自然環境の働きに神を感じ、その働きが現れる場所で、大王や各地の首長は神を祀った」（一〇八頁）結果、祭祀遺跡が残されたと考えるが、神郡になった地域は「国家領域の中で特に水陸交通の枢要な場所、国家として重要な地点とし

て大和王権に認識され、その重要な環境の働き＝神を祀る場となっていた」（一一〇頁）とする。ついで、「古代の富士山信仰と火山祭祀の系譜」では、火山災害をめぐる祭祀の実態を史料と遺跡から探り、日本列島の過酷な自然に対する人々の神観念に迫る。

「祖への信仰と祭祀」は、まず「古墳と死者への儀礼」で「古墳における死者・遺体の扱い方」（一六八頁）をあきらかにし、その特色として「古墳に納めた死者・遺体を厳重に密閉、区画・遮蔽」（一六九頁）・「遺体にそえた副葬品の組み合わせ」（一七〇頁）・「死者・遺体に対して飲食を供えるという儀礼」（一七〇頁）を掲げる。ついで、「古墳と祖の祭祀」では、『風土記』『続日本紀』などの史料や埼玉県稲荷山古墳出土の金象嵌銘鉄剣を手がかりに、「古墳における儀礼は、この霊威が強い特別な人物『祖』とその遺体を対象とした『祭祀』と定義してよいだろう。古墳とは、単に遺体を安置する墓ではなく、霊威の強い『祖』の遺体を納め、副葬品を捧げ飲食を供えて国・地域の安寧を願う『祖への祭祀』の場であった」（一八五頁）とし、「自然の働きに由来する『神』と、各氏族や人々の系譜を象徴する『上祖・祖』とは、ともに貴重な品々（供献品・幣帛と副葬品）を捧げ、飲食を供えるという共通した形で祀られた」（一八七頁）と結論づける。さらに、「黄泉の国と祖の継承」では、五世紀に神と祖の祭祀が成立した後、律令国家が成立した七世紀に、神の祭祀が大きく変容し、「古墳は死者・祖を祀る場から、遺体を安置するだけの場所『墓』へと変化」（二〇二頁）したことを説く。

最後に、「古代祭祀の終焉と現代—エピローグ」では、「古代の灌漑用水系の再編に伴い、それを信仰面で支えた五世紀以来の神への信仰も変化した。伝統的な祭祀の場に経塚を造営したり水源に鏡を投入したりして、神々は、神仏を一体に考える本地垂迹説で仏教的に解釈され」（二一七頁）、「死者・祖先に対する考え方は、古代的な『祖』から、仏教の供養を受ける『霊・ほとけ』へと変化していった」（二二〇頁）とし、古代祭祀の終焉を描く。

二、若干の所見

ところで、本書では、いくつもの注目すべき見解が披瀝されているが、ここでは筆者が興味をもった二点のみ取り上げておく。

一点目は、大場磐雄の祭祀遺跡解釈とは異なる見解を提示

し、古代祭祀研究を前進させたことである。依代を用いることでどこにでも臨時の祭場を設営できるとした神観念を批判し、地域の自然のなかから生み出された聖地こそが祭場であるとして、日本の自然と景観のなかに神を位置づけた点は、今後注目される見解であることは疑いない。まさに「新視点」というべきであろう。しかも、神祀りの方法は、霊威をもつ祖にも敷衍され、神と祖は同様に祀られたと考えた点も、祭祀遺跡と古墳を同じ土俵で論じた優れた学説として今後評価されることになろう。もっとも、霊威を発するものが神であることは、本居宣長がすでに説いていたことで、祖もまた神の一つの現れということもできるかもしれない。

二点目は、五世紀に成立した神・祖の祭祀が、七世紀に大きく変容したものの、基層においては連続していることを解明した点である。とりわけ、古墳時代の祭具の大部分が、律令時代の祭祀にまで継続している事実を、具体的な考古資料で示したことは重要である。従来、古墳時代には石製と土製の模造品が祭具の主流であったが、律令時代には木製模造品や斎串などに変わるとする見解が定説化していたが、見かけ上の現象に騙されただけの謬説であったことが明白になった。

しかし、残された課題がないわけではないので、そのことにも若干言及しておこう。

まず、依代の概念であるが、大場は磐座などを指して呼んでいるが、折口信夫は複数の磐座などのうちで神が降臨して欲しい地点にあらかじめ付けた目印を指して呼んでいる。つまり、大場は、折口を正しく理解しておらず、依代概念を曲解してしまったのである。なぜそうなったのかを含め、依代の概念を整理し、大場＝折口説を見直す必要がある。

次に、祖であるが、祖といって祖先や先祖などに置き換えていない著者の姿勢は正しい。ただ、親子関係が通時的に存在する社会関係である以上、古墳時代に固有の特色をより明確化する作業が必要であろう。残された史料が少なく、困難な作業ではあるが、その結果、神と祖の関係をより精緻に把握できるようになろう。当然、首長の権威の源泉を解明し、古墳時代社会を正しく理解することにも通じるはずである。

おわりに

本書が提起する問題は大きい。それに比して、本書評で取り上げることができたのは、ほんの一端に過ぎない。一般向けに書かれた本書は、読み易く、しかも廉価である。本書は、古代

祭祀についての必読文献となること疑いなく、しかも学際的な内容であり、祭祀に関心のある多くの人にぜひ読んでいただきたい一冊である。

（四六判、二三二頁、吉川弘文館、二〇一六年一月、定価一七〇〇円＋税）